

男性における健常者および高血圧患者の食塩味覚感度について

日本女大家政 ○丸山千寿子 村田素子 富山順子
隈元恵里 松尾里美 布川直子

〔目的〕減塩食事療法を行なう場合には、うす味の食習慣を確立する必要があるが、食塩に対する味覚識別能は、正常者に比べて高血圧患者では鈍化していると報告されている。そこで、健常者と高血圧患者の味覚識別能を調べて実態を把握し、栄養指導に資することを目的とした。

〔方法〕1988年5月に都内の某大手商社の定期健康診断で、21～63歳の男性社員1110名を対象として、食塩味覚閾値判定濾紙を用いて味覚検査を行なった。そのうち検査時に疾患を持たず、体調が良く、薬も飲んでいない健常者391名と定期健康診断で高血圧と判定された高血圧患者138名について比較検討した。また、同年12月に、健常者364名と高血圧患者132名を対象に食生活に関する調査を郵送で行なった。

〔結果〕食塩味覚閾値は、40～44歳までは健常者群と高血圧患者群との間に差はみられなかったが、50～54歳において、健常者群(0.60 ± 0.06)より高血圧患者群(0.86 ± 0.52)が有意に高値であった($p < 0.05$)。また、健常者群では35歳から49歳では徐々に高値を示すのに対し、高血圧患者群では40～44歳群に比べて45～49歳群が高値であった($p < 0.05$)。食生活に関する調査(回収率70.8%)では、高血圧患者群のうち、減塩食事指導を守っている群は守っていない群に比べて食塩摂取に関する意識が高い傾向にあり、特に50～54歳群において味覚閾値が低値であった($p < 0.05$)。以上のことより、現在40歳以上の男性には味覚検査により食塩味覚感度を検査する必要があると思われる。